

看護用品の解説

沖縄愛楽園では、米軍より配給された綿シートからガーゼや包帯を作り、再利用していた。

看護用品にまつわるエピソード

沖縄愛楽園（昭和 13 年創立）に入院または通院していたハンセン病患者数は 900 人を越え（昭和 26 年～昭和 36 年）、昭和 30 年代初頭はプロミンの静脈内注射が主たる治療であった。そのため看護婦の主な日勤業務は午前中に与薬と外科治療患者のほとんどがもっていた裏傷（足底潰瘍）の治療にあっていた。午後は不足していた衛生材料作りや注射器の洗浄、患者の苦痛を和らげるための注射針の選別、針の研磨も行なっていた。衛生材料は米軍より配給された払い下げの綿シートを破り、ガーゼや包帯を作っていた。ガーゼは 4 つ折り、8 つ折りに作っていた。使用した衛生材料は洗剤とハイターで洗い、再利用していた。干す際にはしっかりしわを伸ばし、天日干しをしていた。洗う役割をもった患者もいた。

（金城文子，2004）

解説

沖縄愛楽園入園者自治会が作成した資料によると、入園者には重病棟・不自由舎棟の看護付き添い、治療室の包帯作業、義足製作などの作業が開園当時からあった¹⁾。職員の人手不足と人件費の不足のため軽症な入園者は重症な入園者を助けることが以下のように決められていた。

不自由舎ハ（男子不自由舎ノミ）入園者相互ノ友愛精神ニモトヅキ比較的健康的ナモノガ附添ニ従事スル規定ヲモウケソレニヨッテ附添ノ欠員ヲ補充スル²⁾

感染予防の観点から、現在では衛生材料は使い捨てになっている。しかし、物が十分でない時代には洗剤やハイターを使用して洗浄し、再利用していた。その再利用過程の中に看護師と共に入園者も手伝っていたことは沖縄愛楽園の特徴といえる。衛生材料作成には入園者も携わっていた。

1) 命ひたすら一療養 50 年史ー 沖縄愛楽園入園者自治会発行，P192，1989.

2) 前掲書，1) P194

（上原綾子，2004）